

目的 福岡市に於て7月上旬に行われる博多祇園山笠行事は、凡そ700年の歴史をもつ夏祭で、今年2月に国の重要無形文化財の指定を受けた。山笠行事はそれに携わる人々（山笠参加の各町内の男性）は、祭期間中特定の衣服（法被）を着用する。この法被は主として久留米絣が用いられその形態、文様、着装法は伝統による仕来りが守られている。今回はこの郷土の伝統ある民俗行事の中の衣服を取りあげ、その特徴を調べ、その衣服の持つ機能的合理的な面も考察したい。

方法 1. 祭用衣服の実物数種を選び、その構成上の特徴、用布の種類を調べた。
2. 資料調査と郷土史家のインタビューを行い、祭用衣服の文様、着用法等の変遷と現状について調べた。

結果 1. 夏祭衣服は各地にも独特のものがあるが、博多山笠の場合は祭期間も長く（公開期間だけで15日間）その準備期間も通して法被が着用され、祭における役割や年令によっても規定がある。2. 法被の文様は各町や流れ（町が集まった単位）によって異なるデザインを踏襲している。その文様を見れば所属の町名が判る。3. 法被は日本の優れたデザインの一つであるが、殊に追山笠（山笠競走）に用いる水法被は、その行動に適応した用布、着装法が考慮されている等、伝統的な衣服を深く観察すると、古い形態の中に現代のファッションに通じる新しさを見出す事が少なくない。又、装飾的に偏向した現在の和服への反省材料も見出されて興味深い。